

コホクカイドウを用いたリンゴ高接病の検定法

研究のねらい

昭和58年頃、デリシャス系品種の価格低迷により品種更新の気運が高まったが、増殖品種の大部分のリンゴ樹が高接病ウイルスに感染していたため、穂木採取用の無毒樹を探索する必要にせまられた。そこで、生産者が自ら実施できる高接病の検定法を確立し、高接病の被害を未然に防止する。

研究の成果

高接病の病原ウイルスとして、マルバカイドウ台木を枯死させるCLSV普通系、ミツバカイドウ台木のある種を枯死させるSPV及びSGVが知られている。これらのうちCLSVとSPVは、コホクカイドウによって短期間に高感度で検定できることが判明した。わが国ではSGVに反応するミツバカイドウ台木が非常に少ないと推定されるので、コホクカイドウの検定で無毒と判定された樹は無毒母樹として安全に利用できる。

〔検定方法〕

実生台木にコホクカイドウを切り接ぎし、発芽させた後、2～3個の検定樹の芽又は樹皮を実生にそぎ接ぎする。検定樹が保毒しているると、接ぎ木12～20日後にコホクカイドウの新しょう又は新しょう葉に先枯れ、褐色斑点、赤色斑点、白色斑点、奇形、反葉などの症状が単独又は重複して現れる。これらの症状が全く発生しない樹を健全樹とする。



検定方法（二重芽接ぎ法）



CLSV感染による病徴

発表資料

1. 病虫部（1985）. シャイデッケリによるリンゴ高接病ウイルスの検定法. 昭和60年度指導奨励事項：65-66. 注）このシャイデッケリはコホクカイドウと後に判明。
2. 松中謙次郎ら（1976）. リンゴ潜在ウイルスに関する研究 指標植物としてのMalus Scheideckeri Zabelについて. 日植病報 42：70-71.
3. 町田郁夫ら（1984）. Malus Scheideckeri Zabelによるリンゴ潜在ウイルスの保毒実態調査. 北日本病害虫研究会報 35：187.